

断酒継続しているアルコール依存症者の成功体験の分析

○職員 A（精神保健福祉士）

医療法人耕仁会札幌太田病院 地域福祉課

【はじめに】

アルコール依存症の長期予後として治療後の断酒率は追跡期間が 2 年から 3 年で 28～32%、5 年前後で 22～23%、8 年から 10 年で 19～30%、13 年前後で 18～25%と期間が長くなると減少するが、一方で治療を機に断酒できている人もいることがわかる。本研究では当院通院中のアルコール依存症者が断酒継続できている要因を追究するため調査を行った。

【対象者・方法】

対象者は当院 1 階デイケア通所しており、断酒が 3 年以上継続している患者から性別・年齢に偏りがないように 3 名抽出した。調査時期は令和 6 年 8 月 14 日～令和 6 年 8 月 19 日。半構造化面接でインタビュー形式に①断酒継続できている理由②お酒の誘惑に勝っている理由を中心に経過を聴取した。

A 氏（50 代女性、断酒歴 11 年） B 氏（60 代男性、断酒歴 17 年）

C 氏（80 代男性、断酒歴 30 年以上）

【調査結果】

A 氏：①家族関係がよくなったから②病院に行かないといけいないと思っているから、自助グループで飲酒していた頃の話をして「もうお酒を飲んではいけない」と思うから

B 氏：①生活リズムを崩さないようにしたから②デイケアや断酒会とつながったから

C 氏：①②抗酒剤飲むことをやめて「いつでも酒が飲める」という気持ちになり気が楽になったから、「お前は酒飲んだらだめだぞ」って言われていたら逆に飲みたくなる

【考察】

今回の調査では全員が断酒継続できている理由を答えていたが、共通する理由はなかった。長期間断酒していると断酒する理由が曖昧になり答えられない人もいるかと予想していたが、それぞれ自覚していた。このことから本人が断酒継続できている理由を自覚しているからこそ断酒への意識を保つことができているのではないかと考えた。

C 氏の発言から周りが断酒を強制するのではなく、本人が断酒する意思を持たなければ断酒は続かないと考える。

本研究では 1 階デイケア通所者 3 名のみの聞き取りとなり、人数が少なく年代にも偏りが出ってしまった。そのため、研究の妥当性などを考えると今後は対象者の条件や調査方法を見直す必要があると考えた。

【終わりに】

アルコール依存症治療に関わる際は治療や断酒会の参加を強要するのではなく、本人が断酒できるような方法を一緒に検討していく。その中で必要な情報提供や環境調整をしていくことがソーシャルワーカーとしてできることなのではないかと考えた。